# いやいやいやいやいやいや…マジ？

苦労度MAX!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いやいやいやいやいやいや…マジ？

【Ｎコード】
Ｎ３０１０Ｙ

【作者名】
苦労度ＭＡＸ！

【あらすじ】
はじめまして。天裂斬（あまさきりこ）…。それが今の俺の名前だ。
聞いてくれ。俺はハガレンに出てくる真理に、『「お前、リリカルなのはの世界に行ってこい。対価に相応しいチートやるから。」』と、言われ、俗に言う「チートトリップ」をさせられた。

読者の皆様！またもや作者はやらかしました！

チート、ネタ被り、駄文、不定期更新、原作ブレイクなどなど、厨二な展開が過分に含まれております！

苦手な方はUターンして下さい。

## 主人公設定…マジ？（前書き）

皆様！またまた作者はやっちまいました！

今回は主人公の設定のみです。

なお、本作品は、作者が書いているもう一つの作品、『ちょ！勝手につけんな！！』の息抜き程度にしようと考えております。

それでは設定です！！

## 主人公設定…マジ？

主人公設定

名前：そこら辺にいる一般人（トリップ前）→天裂斬（あまさきりこ）（トリップ後）

年齢：１８歳（トリップ前）→５歳（トリップ後）

容姿：トリップ前は１００ｋｇ超えの中肉中背のフツメン→　ＢＬＥＡＣＨの天鎖斬月の子供ｖｅｒ．（トリップ後）

職業：フリーター（トリップ前）→小学生からやり直し（トリップ後）

性格：テンションは低め。しかし、熱血漢。クーデレ。キレると恐い。怒らせた奴は地獄を見る。

好きなもの：仲間。友達。信念がある奴。護りたい人達。翠屋のシュークリーム。

嫌いなもの：ＫＹ。現管理局の全て（一部の人間を除いた）。芯の無い正義。正義を騙る糞野郎共。平和を乱す奴。

チート一覧：以下の通り。

・天才の頭脳＋瞬間記憶能力。

・『金剛番長』のヒュペリオン体質＋『とある』の聖人の身体能力。

・『犬夜叉』に出てくる天生牙と爆砕牙＋『真理』と通信可能なデバイス。
デバイスの名前は『黒椿（くろつばき）』形状は両手に現れる、真紅の宝石が嵌め込まれた黒い手袋。
ＢＪはまんま天鎖斬月が着ていたフードコート。

## 主人公設定…マジ？（後書き）

こんな感じで絡ませていくので、これからもよろしくお願いします！

次回までしばしお待ち下さい。

## 異世界トリップ…マジで？（前書き）

今回はチートトリップ物に挑戦します。

それと、真理が余計な事をしてくれます。

何でこうなった…ｏｒｚ

それでは！どうぞ！

## 異世界トリップ…マジで？

おかしい…。俺の家の天井はこんな白くない。それにいつもの布団の感触もしない。

あぁ。自己紹介が未だだった。俺の名前は『――――』ってあれ？名前が出てこない…。

すると、独特の『嫌悪感』が残る声が聞こえた。

「『やっと起きたか…。』」

俺は驚いた。マジで。

だって目が覚めたら、目の前に居たのが、あの有名な『鋼の錬金術師』に出てきた『真理』だよ？

「……。」

あまりの出来事にフリーズしてしまった。

「『ふむ…。状況についていけないか？なら、用件だけ一方的に言ってやろう…。

今からお前には“リリカルなのはの世界”行ってきてもらう…。拒否権は無い。

俺が決めた事だ、恨むなよ。
そこでお前には対価を払ってもらい、あらゆるチートを俺からやろう…。』」

…チート？それよりも対価払ってもらうって…。

「…おい、何で俺なんだよ？他にもいるだろ？それに対価だと？
お前いったい何様のつm「『俺様だよ！小僧！！』」

「『いいか？よく聞け。俺は本来なら有無を言わさずお前を消せた。
それをしないで、対価も貰わずわざわざ説明までしてやったんだ。

行くか行かないか？選択肢なんか最初から無いんだよ！！
解るか？

てめぇは俺に従うしか無いんだよ！

小僧！！！！』」

重圧（プレッシャー）…なんて言葉が生温く感じる位の『何か』に押し潰されそうになる俺。

「かはっ…あっ…はっ…はっ…はっ…かふっ…」

息もできない位の『恐怖』。息ができずに思わず倒れ込む。これが…

「『あ～あ、脅し過ぎたか…。本当に人間は脆弱だな…。
だからこそ、面白いんだがな…。』」

『真理』！！！！

～数分後～

あれから落ち着いた俺はチートを設定した。
にしても、凄まじい。
こんな奴にエドは勝ったのか…。

「『ふむ…。お前が払う対価は、“生前の自分の全て”。つまりは、
お前の存在その物だな。
これでお前の前世では、お前は元からいなかった事に成る…。

で、チートは
・天才の頭脳
・瞬間記憶能力。

・『金剛番長』のヒュペリオン体質
・『とある』の聖人の身体能力。
・『犬夜叉』に出てくる天生牙と爆砕牙
・この俺、『真理』と通信可能なデバイス。
デバイスの名前は『黒椿（くろつばき）』形状は、両手に真紅の宝石が嵌め込まれた黒い手袋。
ＢＪはまんま天鎖斬月が着ていたフードコート。
トリップ後の容姿はＢＬＥＡＣＨの天鎖斬月。で、間違いないな？』
」

「あ、あぁ…。」

「『ふっふっふっふっふ…。そんなに怯えなくてもいいだろう…。
別に獲って食うわけでは無いんだ…。

あぁそうだ！それと貴様に“賢者の石”を埋め込んでやる。
なぁに心配するな…。不死に成るだけだ…。
あいつらみたいに、“賢者の石”が消えても、死にはしないがな。
それと犬夜叉の武器だが、お前に妖力は無いからな。大サービスで、お前に殺生丸の妖力を入れて、使えるようにしといてやるよ…。』」

は？『賢者の石』…だと！

「おい…ふざけるなよ！俺はそんな事、頼んでいない！！お前の興味本位で勝手に使うな！！人の命を何だと思ってる！！」

「『はぁ…。まだ理解していないのか？

俺は“真理”だ。たかだか数千人の人間がどうなろうが知った事じゃない…。

そろそろ送るぞ…。』」

「なっ？！待て！…！？」

俺は真理の野郎に殴りかかろうとした。

その時、真理に対する怒りで単純思考になっていた俺は、自分の状況に気が付いてなかった。

「なっ？！これは！“真理の門”の！あの“黒い手”か！！」

そう…。俺は何時の間にか『真理の門』から出てくる、無数の『黒い手』に捕まっていた。背後に視線をやると、両開きのデカイ門の中に巨大な眼が有り、俺は引きづられるようにその中に押し込まれようとしていた。

「ちくしょおぉ！！せめてっ！！一発だけでもぉっ！！」

そう叫び、何とか前に出ようと踏ん張るが、門から出てくる黒い手によって、俺は地面に押さえ付けられ、そのまま門の中に入れられる。

「『ハハハ

その時まで！！首を洗って待ってろよぉ！！！！！」

ギィィ…バタン！！

門が完全に閉じ、俺の意識に闇が訪れた。

その後の『真理』

「『俺に宣戦布告をする奴なんて、あの時の餓鬼とあいつ位かな…。

まっ。せいぜい楽しませろよ…。

――――――

ザザ〜ン…。ザザ〜ン…。

「うっ…。ここは？」

俺はどうやらあの後、無事にリリカルなのはの世界に着いたらしい。

砂浜に仰向けに寝ていた俺は、起き上がると眼の前に広がる、夕陽の所為で橙に染まった海に、しばし見惚れた。

カサッ…。

「ん？なんだこ…。真理の野郎…！」

俺は自分の声に違和感を感じた。身体を触りながら確認して、ついでに、立った。

目線。
低過ぎる。
手の大きさ。
5歳の男の子位の大きさ。
声。
声が高過ぎる。
これにより求められる答え。
すなわちそれは肉体の幼児化。

「…すぅ。

真理の馬鹿野郎おぉぉぉォォォォォォぉぉぉぉぉ！」

目の前で沈んでいく夕陽に、そう叫ばずにはいられなかった。

「ハァハァハァハァ…。」

《あの、マスター？》

「！！！！」

《うわ！！マスター！？そんなに驚かないで下さい！此処です！マスターの手にはまってる…、左手じゃなくて！右手です！！》

いきなり聞こえてきた声に驚いて、４ｍほどジャンプしてしまった。誰かに見られてないだろうな。

「お前が俺のデバイスか。」

《はい！マスターのデバイスの『黒椿』です！これからよろしくお願いします！》

「あぁ。よろしく、黒椿！」

俺のデバイス、真紅の宝石がついた手袋、『黒椿』になだめられる事１０分。混乱から回復した俺は、『黒椿』とお互いの自己紹介をしていた。

『黒椿』の基本スペックは、飛行能力と、通信機能、シールド、バ

インド、広域探査（半径３０ｋｍ）だけだが、なのは達のような砲撃などの攻撃魔法を撃てない代わりに、その他の性能は他のに比べて格段に上らしい。
さらに、両拳に妖力を纏わせる事ができるのとこと。それと、魔力ではなく、妖力で機能するらしい。
自分の所為で攻撃魔法が撃てない事を謝罪してきたが、天生牙と爆砕牙があれば十分だ。気にするな。と言っておいた。

《そういえばマスター！手紙があった筈です！探してみましょう！》

「そうなのか？」

名前の割に、元気な性格だな。と思いつつ、手紙を探す。

「そう言えば、この辺に…！これか。」

ペラっ…。

俺は最初に自分が倒れていた所を探し、砂を被っていた、白い便箋に入った手紙を見つけて、中を見た。

～小僧へ。～

この手紙を見たという事は、無事に着いたらしいな。

まず、お前の名前は天裂斬（あまさきぎりこ）だ。

文句は言うな。

次に、そこは原作の始まる４年前の海鳴市だ。
それに合わせて、肉体も変化させといた。身体能力も簡単に調節出来る筈だ。
天生牙と爆砕牙だが、デバイスの中に仕舞ってある。安心しろ。お前とそのデバイス以外の存在が持つと自動的に戻る様にしておいてやった。悪用される事は無い。

それと金の心配はするな。この便箋に入ってる預金通帳はお前名義で登録している。
残額を見て、腰を抜かすなよ。

じゃあな、連絡はデバイスに直接話し掛ければ、俺に繋がる。応答がなかったら…。

諦めろ。

“真理”より

ＰＳ
～お前の身の上は自分で決めろ。～

「《……。》」

感想。

不安が隠しきれない。

「…とりあえず、預金通帳を見るか？」

《…！そ、そうですね！そうしましょう！！》

見てみた。

預金残額：￥１０００００００

《しかし！》

「気にしたら、負けだ…！」

《…分かりました。》

「ありがとう黒椿。」

《いえ。

…！マスター！》

「どうした？」

《女の子の泣き声をキャッチしました！！》

「女の子？」

まさか。この時期に女の子の泣き声って…。

「行ってみるか。」

俺はそう言うと、

《えっ！？マスター？！》

走り出した。

時速８０ｋｍで。

～ある運転手の証言～

「いやね！驚いたよ！！
なんせ５歳くらいの坊主が俺の車とタメはれる速度で走ってたんだから！

間違いねぇよ！！だってあの時の俺の車の速度は、時速８０ｋｍだぜ！メーターだって見たさ！それなのに、同じスピードで走ってたんだ！信じてくれよ！！」

～以上、警察にスピード違反で捕まったある運転手の証言～

その頃、夕陽で橙に染まった公園。
そこにあるベンチに、茶髪のツインテールの女の子が一人泣いていた。

わたしのなまえは、たかまちなのは。
５さいなの。

「ひっく…うっ…えぐっ……」

「…なんで、泣いているんだ？」

「ふぇ？」

こえがきこえて、かおをあげると、すごくかっこいい、おんなのこ？がいたの！

やっぱり、なのはだったか。

「えと…えと…。」

「あぁ…。自己紹介が未だだったな。
俺は天裂斬（あまさきぎりこ）だ。
君の名前は？」

「あ、うん！わたしはたかまちなのは。５さいなの！」

「そうか。じゃあ、なのは。
何で泣いてたか教えてくれないか？」

「……。」

やっぱり、話すのは嫌か？

俺はなのはの隣に座る。ベンチの冷たさが腰を伝って、全身に来る。

「…あのね、おとうさんがけがをしちゃって、おかあさんも、おねえちゃんも、おにいちゃんも、みんな、いそがしそうなの…。

だから、なのはは、…みんなのじゃまに、すんっ、ならないように、ひっく、ひとりで、ひく、ひとりで…。」

…心が痛むな。こんな優しい娘が傷付いて、優しくされてる家族が、この娘の優しさも孤独も気付かないなんて…。

「ふぇ？」

俺は無言でなのはの頭を撫でた。

撫でながら俺はなのはに俺の思いを伝える。

「…なのは。

辛かったら、頼って良いんだよ。

伝えて良いんだよ。

一人が嫌なら寂しいって。

皆と一緒に居たいって。

なのは、今は俺がいる。

だから、今は俺に頼れ。」

「う、う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁん！

ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！
ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

なのはは俺に抱きついて泣き叫ぶ。そして、思いの丈をぶつけてきた。

「もう、ひく、もうひとりはいやなの！
ぐすっ、さみしいの！
ひっく、みんなと、
えぐっ、みんなといっしょにいたいの！！」

また泣き出すなのはを、俺は抱きしめて慰める。

「大丈夫。そう言えば、伝えれば、きっと。」

「ひっく、ほんとう？」

涙目と上目遣いで見てくるなのは。ぐっ…かわいい…。

「あぁ。なのはみたいな優しくて可愛い娘の家族なんだろ？
だったら、なのはの言葉を、気持ちをちゃんと分かってくれるさ。」

「ぐすっ…。えへへへへへへへへ。」

目の淵に涙を溜めて、照れながら、鼻水も垂れているが、今の彼女にとっての、最高の笑顔が見れたと俺は思った。
やはり、子供でも女は笑ってないとな。
顔が赤かったが、まさかな…。

俺はなのはの鼻水やら涙やらを何故か手元にあった、ポケットティッシュで拭いてやり、帰ろうとしたが、

「おれいがしたいの！わたしのおうちにくるの！」

と、なのはに腕を掴まれてしまった為、仕方なく承諾した。

まさにその時だった。

「貴様！なのはから離れろ！！」

最強の高町恭也（シスコン）が現れた。

## 異世界トリップ…マジで？（後書き）

というわけで、いきなりシスコンと遭遇しちゃった斬くん！どう成るんでしょうか？！

「作者の都合と技量が鍵だ。」

それでは皆様！

次回まで乞うご期待！！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3010y/

いやいやいやいやいやいや…マジ？

2011年11月11日02時52分発行